52. 村をあげての水防

河川の堤に囲まれた地域は、豪雨になればつねに浸水の危機にさらされてきた。旧太中で明治 37 年（1904）生まれの I 氏のメモから水防に当たる人々の様子をまとめた。

◆川に囲まれたクルワの地形

図は I 氏の図のトレース。境川・丑寅川・茨木川に挟まれて内野曲輪、向受曲輪というクルワ（曲輪＝輪中）があった。豪雨時には排水の悪さと安威川からの逆流で浸水した。

◆水防は五人組で

水害対策は昔からのしきたりで五人組で行われた。大正時代の太中は約 50 戸でほとんどが農家。5〜6 戸で 1 組で 8 組あった。組の頭を組親（組頭、伍長）、組員を組子といい、6〜9 月の雨期には月当番で警戒に当たった。

◆池からの水を止める

八丁池の水は東海道線の山手側の八丁井路を流れる。その途中の 5〜6 カ所に線路をくぐる樋管があり、田圃を灌漑していた。大雨になりそうだと月番の組親の判断で組子 2 人に“ 上田の樋詰 ”を指示、組子は樋管のふたをして回り、まず上流からの水を止めた。

◆安威川の逆流を防ぐ

雨が 100mm を越えると月番の総出。合流点の 2 ヶ所の樋を閉め、安威川の逆流を防ぐ。空田橋の堰板は向受（むかうけ）曲輪への逆流を防ぎ、隅の樋は内野曲輪への逆流を止める。どちらも上流からの水と逆流水の水位が等しくなった時を見計らって樋を閉めるのがコツ。水位差があると樋門が動かないし、曲輪の水はなるだけ多く流したいからである。

◆早鐘で蓑笠つけて堤防へ

なお大雨が続き、境川・丑寅川・茨木川が増水すると、八丁鐘を合図に寺々の早鐘が鳴りわたり、男は蓑笠で持ち場の堤防へかけつけ、女は集まって炊きだしにかかる。堤防の要所にはカセ小屋があって、水防用のカセ（杭）、俵、かます、縄が用意されていた。

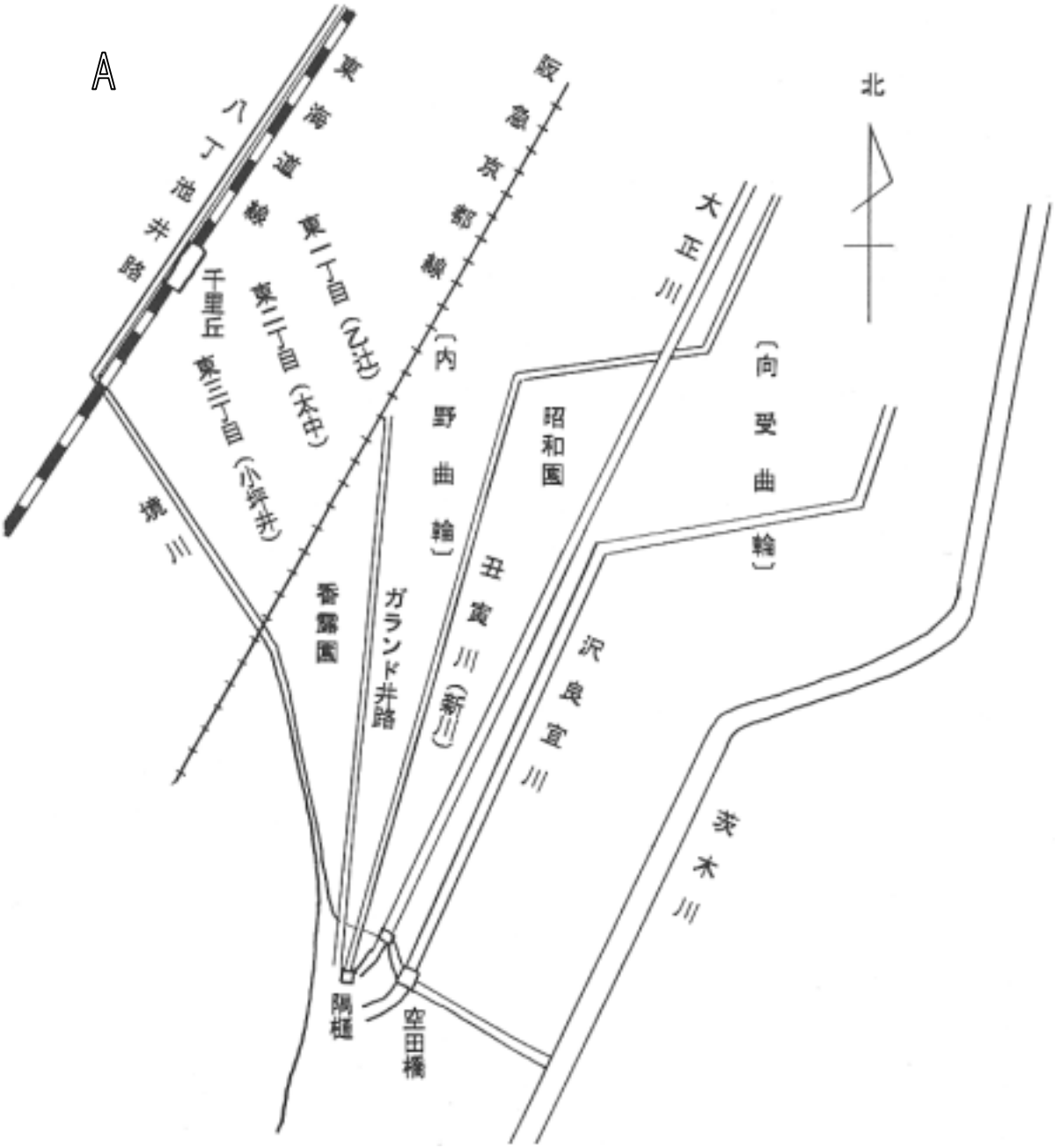
◆堤防が湧く

堤防が砂質なら増水した水圧で斜面の中程からでも水が湧いてくる。放置すると穴が広がり危険なので〈B〉のようにカセを打って板と古畳をあて、内側に土嚢を積んでいく。土嚢はカマスに土を 30kg ほど入れて縄で縛ったもので、雨中で重さも忘れて作業した。

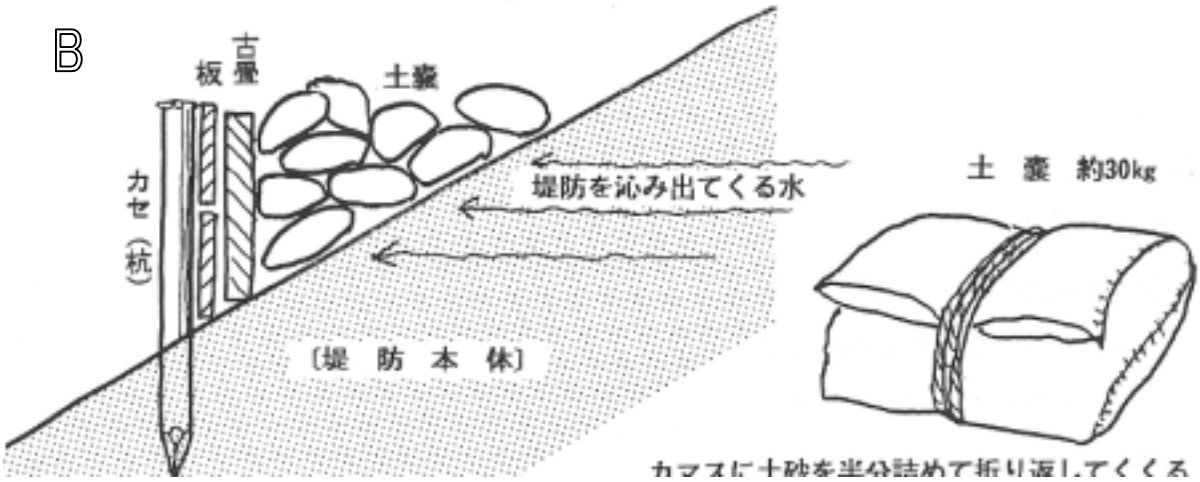
◆月に何回も

大正 10 年（1921）頃、6 月の月番の総出が 6 回、村の総出が 3 回あった。こうした水害も大正川の開削、茨木川の安威川への合流、万博関連事業の河川拡幅等でなくなった。

A


東海道線
八丁池井路
千里丘
東三ト田（ヌ北）
東三ト田（大中）
東三ト田（小新北）
境川
阪急京都線
〔内野曲輪〕
香露園
ガランド井路
昭和園
丑寅川（新川）
大正川
〔向受曲輪〕
沢良宜川
茨木川
陽樋
空田橋
北

B


板
古畳
土嚢
カセ（杭）
堤防を沁み出てくる水
〔堤防本体〕
土嚢 約30kg
カマスに土砂を半分詰めて折り返してくくる